

## 9月第1週の礼拝説教

■日 時：2022年9月4日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節 第14主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「主よ、信じます」

■聖 書：ヨハネによる福音書第9章35－41節（新約p186）

■讃美歌：210「来る朝毎に 朝日とともに」 504「主よ、み手もて」

本日は、9月の第一主日ですので、「日本基督教団信仰告白」を先ほど一緒に告白いたしました。その中で、後半では「使徒信条」も告白いたしました。では、なぜ礼拝の中で信仰告白を告白するのでしょうか。また、私たちが礼拝の中で常に告白している「使徒信条」にはどのような意味が込められているのでしょうか。本日は使徒信条の冒頭部分、元の言葉では「我は信ず」と始まるのですが、これを一回目として、これから何回かに分けて、関連のある聖書の箇所を読みながら、一緒に考えてまいりたいと思います。

私は30年以上にわたって牧師を続けてきましたので、時々、次のように話される方に出会います。「私は確かにキリスト教の信者になったのだから、私の信仰を言い表すために、わざわざ型にはまった信仰告白や信条などを用いる必要はない」とか、「私はただ一生懸命に聖書を読んで信じているのだから、神様をどう信じるとか、イエス・キリストをどう考えるとか、聖霊とはどのようなものなのかとか、あるいは教会とは何なのかなどということはあまり考える必要がない、ただ信じることが大事なのだ」などです。実は、私自身もかつてはそのように考えていた時期がありました。

しかし、神学校に行くようになって、ある先生のお書きになった信仰についての初歩的なパンフレットの中で、次のような文章に出会ったのです。ところどころを略して読んでみます。「ただ信じる、という、いかにも、信仰的なようにみえますが、実は、自分勝手なことを考えていることも、ないではありません。ただ信じるという人は、よく、ただ聖書によって信じるのである、というのですが、たいせつなことは、その聖書の内容をどう信じるか、ということなのです。（中略）聖書によって信じるだけということには、あぶないところがあります。聖書による信仰は、こういうものであるということ、はっきり示されなければ、自己流のキリスト教になってしまうのです。信仰告白というものは、聖書の内容を示し、手引きとなってくれるのです。（中略）しかも、この使徒信条は、『我は信ず』という言葉で始まっており、『私はこのように信じている』ということ、誰に對してでもはっきりと言います、という明確な意思があるのです。」この文章は、その当

時の私の思い違いをはっきりと教えてくれました。聖書全体の内容を絞り込んで整え、公に告白するようになったものが使徒信条なのです。ですから、私たちが礼拝をする時、祈る時、聖書を読む時、いつでも、正しい信仰の物差しとして覚えておきたいものと言えるのです。この使徒信条は、2世紀半ばごろから、当時のキリスト教の中心であったローマ教会が、洗礼を授ける時に、洗礼を受けようとする者に対して問いかけ、誓約をさせる時に用いていた「ローマ信条」というものがその原型だと言われています。ですから、「私は信ず」という一人称単数の言葉で始まっており、「私はこのように信じている」ということを、誰に対してでもはっきりと言い表す、という明確な意思があるのです。

ところで、本日の聖書箇所はヨハネによる福音書9章の最後の部分だけを読んでいただきましたが、ヨハネによる福音書9章は、「生まれつきの盲人をいやす」という見出しがついていますように、章全体でそのことを記していますから、全体をご一緒に考えてみたいと思います。主イエスはある時に歩いておられて、通りすがりに生まれつき目の見えない人を見かけられました。そこで、弟子たちが主イエスに尋ねました。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」注意したいのは、主イエスを「ラビ」と呼びかけている点です。今日は、まずその呼びかけの言葉を覚えておいていただきたいと思います。「ラビ」とはユダヤ教の教師に対する「先生」という尊称です。伝統的なユダヤ教にも因果応報の考え方があり、福音書が書かれた当時の社会ではそれが当たり前の考え方だったので、弟子達は自分達が従ってきた先生が、目の前にいる目の見えない人に対してどのような判断をするのかに興味を持って質問したのです。このときの弟子達は、すでに自分たち自身の中に因果応報という答えを持っていたと思われるかもしれません。私たちもよく見聞きすることですが、この因果応報という考え方は、日本人にはよく分かると言われています。なぜなら、この言葉は仏教用語として広く人々の間に広まっているからです。特に家族や親族に病気や不幸などが生じたときに、これは何かご先祖様のたたりかもしれないなどと不安にさせられるひとつの考え方の根拠になっています。私自身、小さなころから周囲の大人たちのそのような考え方に縛られて、何度も心をえぐられるような悲しみを味わったことがあります。また、新興宗教と呼ばれる宗教が様々な方々の心に入り込む一つの考え方でもあります。

そのようなときに私たちが是非思い浮かべたい聖書の箇所が、ヨハネによる福音書9章なのです。そして、何よりも、3節の「イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」という御言葉を思い出し、主イエスの語られた御言葉の力に信頼を置いて歩みたいのです。けれど

も、私たちは、たとえ主イエスが語られた言葉であっても、なかなか言葉だけでは納得することができない弱い存在なのです。ですから、主イエスは生まれつき目の見えない人に対して、9章の6節から7節にあるように「**地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになり、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。**」のです。誰にでも良く分かる具体的な行為をなさることによって、目の見えない人はもちろん、その周囲にいた人たちや主イエスに従ってきた弟子たちにもはっきりと分かる仕方でご自分の力をお示しになったのです。しかし、その場に居合わせなかったユダヤ人の宗教的な指導者であるファリサイ派の人々は、生まれつき目が見えなかった人が主イエスによって目を開かれて今見えるようになっていて、ということに全く信じることができませんでした。ですから、目が見えるようになった人と目を開いた主イエスとをののしって「外に追い出す」という行動に出て、自分たちの社会的な立場を守ろうとしました。

そして、本日の箇所であるヨハネによる福音書9章35節で主イエスは、目を開いてやった彼が外に追い出されたことを聞き、彼に出会うと、「**あなたは人の子を信じるか**」と問われました。36節で「**主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。**」と彼は答えます。注意したいのは、主イエスに対する呼びかけが「**主よ**」となっていることです。最初にお話したことですが、既に主イエスの弟子として従って来ている者たちの呼びかけは、「**ラビ(先生)**」でした。その呼びかけの言葉一つの違いにも、ヨハネによる福音書は深い意味をこめているのです。自分たちの律法の先生として位置づけ、そのお方についていこうとしている弟子たちにとっては、イエスという人物は、まだ他の誰かと交換できるかもしれない教師の一人にすぎません。しかし、「**主よ**」と呼びかける目の見えるようになった彼にとっては、主イエスは他の誰とも決して交換ができない「**救い主**」なのです。37節の「**あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。**」という主イエスの言葉には、その彼の思いをきちんと受け止めてくださっている様子が感じられます。35節から38節の二人のやり取りを読みますと、生まれつき目の見えなかった人が、主イエスに目を開いていただくことによって、主イエスを見ることができるようになったことが鮮やかに描かれています。当然のことながら、主イエスによって本当の意味で目が見えるようにしていただいた者の主イエスに対する応答は「**主よ、信じます**」以外にないのです。

よくよく考えて見ますと、主イエスの前にあつては、私たち誰もが本当は「生まれつき目が見えない」存在なのかもしれません。しかし、そのような私たち一人ひとりを、主イエ

スは十字架の贖いによって、目が見える者へと救い上げてくださったのです。ヨハネによる福音書9章は、41節の「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」という主イエスの言葉で締めくくられています。私たちは主イエスによって見えるようにしていただかなければ何も見えないのです。そのことをいつもわきまえ、また、いつも使徒信条を告白するときには「主よ、わたしは信じます」とお答えして歩む者でありたいと思います。